

氏名(本籍)	にしむらかずゆき 西村一之(北海道)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博乙第2139号		
学位授与年月日	平成17年7月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	台湾東部における漁民社会の民族誌的研究 - 近海カジキ突棒漁の導入と展開をめぐる人的関係を中心として -		
主査	筑波大学教授	博士(文学)	小野澤 正 喜
副査	筑波大学教授	博士(文学)	古 家 信 平
副査	筑波大学教授	博士(文学)	丸 山 宏

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は台湾東部地区成功鎮新港における文化人類学的調査を踏まえて、漁民集団の社会組織、漁民社会の紐帯に関わる民俗の概念の解明を行った作品である。台湾の漁民集団における事例の分析を通して、漢人社会の文化人類学研究における二者関係論の解明を目的とする。

論文は、序論3章、本論2章、結論から構成されている。

序論では、本研究の目的が提示され、台湾の海洋人類学的研究および漢人社会研究上の位置づけがなされ、さらに調査地の概観が示されている。

序論I章の「研究目的」で上述の研究目的が論文構成との関係で示されている。

II章「研究史」の1節「台湾における海洋人類学的研究」では、台湾における海洋人類学的研究について先行研究の批判的検討と併せて研究史上の意義が論じられている。2節「漢人社会研究史：家族親族からグワンシ *guanxi* 「関係」へ」では漢人社会研究において従来 M. フリードマンにより確立されたアフリカ・モデルによる漢人社会の家族親族研究の理論体系を、批判的に検討しつつ再編されなければならないと論じている。その際固定的な系譜関係ではなくグワンシ（関係）と呼ばれる人的関係の実態解明が必須であると論じている。更に近年まで現地調査が困難であった事情からして漢人社会研究において個人と個人を結ぶ紐帯の研究が遅滞してきた学界の状況が示され、その中で本研究は意義を有するとされている。

III章「調査地の概況」では、調査地の位置する台湾東部地区に関する全般的な概観がなされている。1節「歴史的概観」では、日本統治期にこの地区が農業地域から漁業地域に変化した歴史過程の概略が示されている。2節「地理的概観」ではこの地区が近海回遊魚の豊富な海域に臨み、交通網等の面でも恵まれた地理的条件にある点についての概略的説明がなされている。3節「民族集団間関係の概観」では、漢人と先住民アミ族の民族集団間関係について使用言語に着目した記述がなされ、人間関係に関わるいくつかの用語が両者の共通語として使用頻度を増してきたことが示されている。4節「産業の概観」では、調査地の産業の概略が示され、従来米作農業中心であったこの地区の産業構造が日本統治期以降漁業の導入を契機に大きな変化を見せたことが論じられている。

本論では、調査地の近海カジキ突棒漁の歴史と漁民の人間関係に関わる民族誌的資料の提示と分析が行われている。

I章「漁業」の誕生：移民・植民地開発」では、日本統治期の変化を日本人漁民による漁業の移入という側面を中心に記述している。本論文の主要な研究課題の一つである「日本植民統治期に始まる漁業領域の確立とその展開」に関連して、台湾東部の調査地において見られた日本統治期の漁業開発と、調査地の漢人の対応が歴史的な資料に依拠しつつ再構成されている。

1節「新港の形成と漁業移民」では、調査地の漁業開発と日本式の「漁業」の移入の過程が記述されている。1910年代－1930年代に、成功鎮新港は日本による植民地経営の新たな開発対象となり、農漁業・工業の分野への資本と技術の導入がなされ、それにとまなう日本人移民事業が展開された。特に台湾総督府による漁港の建設と日本人漁業移民の募集事業を通して、この地に「漁業」という新たな生産領域がもたらされた事実が示され考察されている。第2次大戦後も新港は、近海漁業基地としての地位を堅持し、国内移住者を受け入れ人口が増加しているが、その最大の要因は植民統治期に起点をもつ漁業の発展であったことが解明されている。

2節「日本人漁業移民の役割」では、日本人漁業移民と現地の漢人の中で起こった接触過程が記述され分析されている。日本人漁民たちは、政府より定住することを奨励され手厚い保護を受けつつ生活基盤を確立した。日本人が企図したことは、未開拓であった海洋環境の利用であり、移民事業を通じた植民であった。その後の太平洋戦争により乗組員の人手不足が生じ、調査地とその周辺に暮らす漢人の中から、この漁業領域に積極的に参加するものが現れた。こうした歴史過程を通して、新港地区に広大な後背地を有する漁業基地のシステムが確立し、調査地の現在の姿が形成されてきたことが記述されている。

II章「台湾東部における近海カジキ突棒漁と人的関係：船長と漁撈の成功を中心に」では、植民地政府によってもたらされた新たな漁撈領域を、漢人を中心とする新港の漁民たちが、いかに利用し、どのような人間関係を構成してきたかに関する分析がなされている。

1節「はじめに」では、調査地に近海カジキ突棒漁がもたらされた経緯と漁法の詳細が述べられている。

2節「漁船経営組織と漁撈集団」では、この漁法に関わる二つの集団、漁船経営組織と漁撈集団のそれぞれの内的社会関係についての提示がなされている。更に1945年の政治経済システムの転換点、1980年代半ば以降の近海漁業全体の衰退過程等の変化がもたらした集団関係の変遷にかかわる記述がなされている。

3節「漁業領域における二者関係：カジキ突棒最盛期の船長を中心に」では、船主－船長関係と船長－船員関係という紐帯に焦点を当てつつ、それぞれの実態が記述されている。漁船長たちを主なインフォーマントとする聞き書きによる調査資料と分析結果が提示されている。漁撈の成功に関連して「船長の力」が重要視されており、それは身体的な能力や経験ばかりでなく呪的な知識を含む複合的なものであることが論じられている。

4節「小括：新港の漁業領域における人的関係」では、船主－船長関係と船長－船員関係の二つの紐帯に共通するのはガムツェン（感情）という言葉で表される「流動性と安定化」を志向する関係性であることが論じられている。更にガムツェンにもとづく人的関係のネットワークの重要性は漁業関係者間に留まらず、より広い社会組織において見られることが述べられている。

結論「台湾東部漁民社会における二者関係：ガムツェン *kamcheng*（感情）で制御する紐帯」では、調査地の漁業領域の人的関係の分析を通じて明らかになった諸点が、漢人社会の研究一般においてもつ意味が吟味されている。漢人社会研究は従来その父系的親族の紐帯が重視されすぎることにより閉塞状況に陥っていたが、ネットワーク論の分析枠組みを使った分析、とりわけ二者関係の分析から、相手との関係性を重視する漢人社会の集団構成原理の新たな研究が展望できることが論じられている。

1節「はじめに」では漢人社会研究で、グアンシと呼ばれる社会関係の枠組がミィエンツ（面子）やレン

チン（人情）などの民俗的価値によって支えられていることを指摘しつつ従来の研究史の批判的な検討がなされている。

2節「漢人社会研究と二者関係論」では、漢人社会研究における二者関係論の系譜の詳細な検討が行われ、今後進められるべき研究領域が論じられている。

3節「互酬性に基づく関係の形成：バオ *bao*「報」」では二者関係の中でもバオ（報）で概念化される2者間の互酬的關係の重要性が論じられている。時間的な持続性をもって意識される債務関係が二者関係の安定的な構築に重要な役割を果たすとされている。

4節「関係を制御する柔らかな構造的な存在：ガムツェン *kamcheng*（感情）」では、従来親族集団での生得的な成員権の取得という視角から分析されてきた漢人社会の分析に、ガムツェンによって示される流動的な状況対応的な分析視点を導入する必要性が説かれている。

審査の結果の要旨

本論文は、台湾現地における長期にわたる文化人類学的現地調査を基礎にして得られた資料に基づき、漁民集団の紐帯と社会構造に関わる民族誌資料を提示しつつ、漢人社会研究の先端的な係争点に関わる提起を行っている極めて意欲的な研究である。

本論文が人類学研究においてなした貢献は以下の諸点にある。

1. 従来研究の遅れていた漢人社会のうちの漁民集団の紐帯に関する厳密な民族誌的成果を学界に提供したこと。
2. 日本植民統治期に始まる台湾漁業の展開過程について、日本及び台湾側の資料の検討を踏まえて再構成し、その現状に関する包括的な分析を行っていること。
3. 漢人社会の人類学研究において従来その父系的親族の紐帯が重視されすぎることにより生じていた閉塞状況にあることを指摘しつつ、ガムツェンやバオ等で意識されている二者間の関係性に着目することによって漢人社会の集団構成が状況適応的な柔軟性によって補完されていることを解明していること。

上記のような研究上の貢献がある一方、以下の課題を今後に残している点が指摘できる。

1. 本論文の中で示された台湾の漁民集団の紐帯の特性に関しては、日本側からもたらされた要因についての更なる吟味が必要とされること。日本植民統治期の漁業の移入という背景をもって成立した組織である以上、それらの要素の更なる考察を通じて漢人漁民社会論の総合的基礎付けを行うべきである。
2. 漢人社会の研究に関して極めて斬新な問題提起をなしているが、それを普遍化するために今後、中国大陸側の民族誌資料、農村社会等の別な状況から提起されている諸研究と比較検討を推し進めることが期待されること。

本論文は、上記のような今後の課題があるとはいえ、論述の確実性、理論的な問題提起の独創性を備えた極めて高い水準の作品であり、学界に一つの地歩を占めうるものと認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。